

# 成果報告書

## I. 研究概要

氏名	トムソン木下千尋
所属	ニューサウスウェールズ大学 人文社会学部 日本研究課程 准教授
招聘回 (招聘期間)	第5回 (2010年10月1日 ~ 2011年2月15日)
招聘研究テーマ	日本語教育における学習者主体の評価
研究目的	日本語教育における評価を考える 1) 「評価」という言葉、考え方を整理する 2) 「学習者主体の評価」を考える

### 研究概要：

本研究は、日本語教育における学習者主体の評価を考えるものである。学習者主体とは、学習者が何らかの変化を起こす主体であることを意味する。日本語教育では、学習者が自分の日本語を変化、発展させていくことに主体的に関わり、自分らしい日本語で自己表現をしていけるようになっていくことだと言えるだろう。また、学習者主体の評価を考えるとは、日本語教育の重要な要素である評価を従来の教師主導型のものから学習者主体の視点でとらえ直そうという試みである。

本研究の前提として、評価という言葉の意味の共有が必須だ。日本語教育では、評価という言葉が英語の Measurement (評価、測定、評定)、Evaluation (評価、判定、成績、見積もり)、Test (評価、試験、テスト)、Assessment (評価、査定、判定、意見) などの意味で使われていることがある。さらに、評価の種類は多岐にわたる。例えば、学習者評価は、学習者の日本語力を測るものと捉えられることがほとんどだが、その中でも口頭評価、文法テスト、漢字テスト、作文問題など、様々なものがある。また、日本語教育で評価の対象となるのは学習者に限らず、教師の教え方、教材の作り方、時には生活指導力などが対象となったり、日本語のコースやプログラム自体が評価の対象となることもある。日本語教育における評価を整理していく必要性が見える。

学習者の日本語能力の評価に限って、何をもちよいい評価とするかという議論を見てみると、評価目標を的確にはかっているか (妥当性)、結果は信頼できるか (信頼性)、評価すべきすべてをはかっているか (問題の包括性)、簡単に実施できるか (容易性)、客観的に採点できるか (客観性)、費用がかからないか (経済性) (石田 1992) など、評価が、教師の視点から考えられることが多い。「何のための評価か」という問いにも、「成績をつけるため」「学習者の習得の度合いを見るため」「次の授業計画を作るため」「教育の成果を外部に報告するため」など、教師のための評価となりがちだ。しかし、本来評価には「学習者にフィードバックをする」「学習者に内省の機会を与える」「学習者に学習方法の修正を促す」など、学習者の視点があってしかるべきものだろう。さらに、教師の視点が評価の結果に注目しているのに反し、学習者の視点は評価を学習のプロセスと捉えているという特徴があるようだ。

そこで本研究では、「評価」を学習のための、学習者のためにおこなうもの、例えば、フィードバック、と規定し、成績をつけるために学習者以外の人のために行われるものを評定と区別することとする。(以下、括弧付きの「評価」は意味を規定したもの、それ以外の評価は括弧なしで示していく。) これを前提とし、学習者主体の「評価」を考察していくために、文献調査、および、教師に対するインタビュー調査をおこなった。

文献調査は、研究滞在先の早稲田大学および、国際交流基金日本語センターの図書館を利用し、2000年以降の日本語教育の評価に関わる文献に当たった。インタビュー調査では、日本語母語話者教師および、非母語話者教師にインタビューし、評価とは何か、理想とする評価とは、評価の現実、問題点、などを聞いていった。

本研究は、調査の結果を学習者主体という新しい学習の考え方の枠組みで考察していくものである。従来型

の学習の考え方には、「学習者は一人で学ぶ」「客観的な社会や文化が存在し、知識は教師から学習者に伝達される」「学習者は、教師の決めた評価に応え、受動的に参加する」「学習者にはモデルとする日本語があり、習った語彙や表現を使う」などの前提がある。しかし、学習者主体の学習の考え方は、「学習者は社会的交渉の中で学ぶ」「社会や文化は主観的に構成されるもので、学習される知識も学習者によって構成される」「学習者は、「評価」課程に積極的に関与し、創造的に参加する」「学習者には表現したい日本語があり、学習者は主体的に自己表現をする」などのように、上記の前提を覆す。「評価」もまた新たな視点で検討されるべきであろう。

本研究では暫定的に以下の4点を学習者主体の「評価」を検討する視点とする。

- 学習者が個人の経験を「評価」過程で使える
- 「評価」の過程で学習者が自己表現できる
- 学習者が協働的に「評価」に参加できる
- 学習者が自己「評価」の機会がある

今後、この基準を再考し、精度を高めるとともに、インタビュー調査の書きおこしから、更なる分析を進める予定である。

展望：

今後、考察を進め、論文を学術誌に投稿したい。可能ならば、「学習者主体の日本語評価」と題した本が作りたい。